鼠ノ石窟と土蜘蛛

― 付、速津媛のこと ―

富来　隆

一、はじめに

『日本書紀』は、言うまでもなく、古代の日本歴史の正書である。景行天皇紀は、神武天皇の東征とは逆に、本州から九州への西征である。だが、この両天皇に共通して、そこに出てくる地名や人名など、すべてが現在の日本語で通用（読解）する、というわけにはいかない。

それはそれとして、景行天皇が九州に上陸するにあたっての豊前の征討と、つづく豊後の征討とには、似かよった点が多いので、まず、そのことから始めるのが理解をすすめるのに便利だと思われる。

まずすぐ分ることは、両方とも、平野部における女性の首長の忠順と、山間部における土酋の反抗である。そしてまた地元に強力な天皇側の味方がいることである。端的に言って、「共通の型」がある、ということだ。だから、それを念頭において、論をすすめたい。

二、景行天皇、豊後に到る

『書紀』の景行十二年、冬十月、碩田国（おおきた）に到る、…速見邑（むら）に到り女人有り、速津媛と曰ふ。一処之長たり。天皇車駕すと聞き、自ら迎え奉りて申さく「茲の山に、大いなる石窟あり、鼠ノ石窟と曰ふ。二の土蜘蛛有りて其の石窟に住めり。一を青と曰ひ、二を白と曰ふ。」、「又直入縣の祢疑野（ねぎの）に三の土蜘蛛有り。一に打猨（さる）と曰ひ、二を八田と曰ひ、三を国摩侶と曰ふ。是の五人は、並に其の人となり強力、亦衆類多し、皆曰く皇命に従わじ、…」

はじめに、豊前と豊後とに、其の記述に「共通の型」

があると記した。しかしまた、少しく注意すると表現の差異があることが目に付く　＝これは、その後の九州各地での場合でも同じである＝。これをどう考えるか。

（豊前）　　（豊後）

碩田国をすぎ速見邑

一国之魁師（ひとくにのかみ）、神夏磯媛　　一処之長、速津媛、

（反抗者）　　（反抗者）

菟狭川上、耳垂　　茲の山の鼠ノ石窟　青

御木川上、鼻垂　　同　白

高羽川上、麻剥　　直入縣の祢疑野　打猨

緑野川上、土折猪折　　同　八田

同　国摩侶

すべて、一処之長　　すべて、土蜘蛛

豊前は、一国之魁師と一所之長。

豊後は、一所之長と、土蜘蛛。

この両者のちがいは何を意味するのか。碩田国をすぎて、速見邑の一之処長と、反抗するは土蜘蛛。

いま此所だけで解決するのはムリであろう。九州をぐるっと廻って各地での「表現」を考えて比較し、答を出すべきであろう。

たゞ、「土蜘蛛」の表現は、すでに神武天皇東征での各地の表現にすでにみられている。神話時代の、「天ツ神」に対する「国ツ神」。その中の天皇族への反抗族であることには間違いない。

そしてこれは、奇妙な人名を「朝鮮語」あるいはその「類音」として理解するのと同じ手法である。

「神」Ka:m（カーム）である。「蜘蛛」Ka:mi（カーミ）そして熊襲の「熊」Ko:m（コーム）である。いずれも、よく似ている。これによってみれば、「土蜘蛛」とは神話時代の「国ツ神」を朝鮮語の類音で、かつ蔑称（表現）としたものであることが理解される。熊襲もこの伝で行けば「神人」（ソ、人）の意味を表現したのだと分かるだろう。

豊前と豊後とでの差異にもう一つある。豊前の反抗者たちは、いずれもみな○○川上と記されている。豊後は「茲ノ山」とあり、その後の記事に、「天皇、来田見邑に留って宮室を興し」「石窟の土蜘蛛を襲って、稲葉川上

に破って悉ころす」と見える（直入郡の北）。

さてこうなると、「茲ノ山」というのは、別府の南側の山を越え、さらに大分川を渡って、その南の、直入郡北部だ、という、まことにややこしい地形上の表現であることに気付く。

『書紀』の文を始めに読んだときは、速見邑の速津媛が「茲ノ山」と言うのだから、あっさり別府の山境かと思った。そして豊前の各川上の長たち（妙な名前だが、それを朝鮮語からすると、いずれも鉱山（鉱穴）の長たちであることからして、別府でもおそらくタタラ、カジに従う土酋であり、ひょっとして浜脇から南の、二群の横穴古墳の人たちなのではないかと思ったのである。

三、鼠ノ石窟

「此の山に」「大いなる石窟あり」「鼠ノ石窟と曰ふ」

「土グモ住めり」

大いなる石窟　鼠ノ石窟　住むは、土蜘蛛。

現代の日本語だったらナンセンスである。土蜘蛛を、朝鮮語から「国ツ神」＝土地の酋長と解するならば、青と白という二組の連中がいることになる。

今度は「鼠ノ石窟」の言葉が問題になる。

「大いなる」とは「多いなる」に通ずるから（豊前での多ノ臣＝大野氏を思えば、明らかであろう）、その点で石窟は「多数の」横穴古墳群（二つの群）と考えられよう。それに都合のよいものは、直入町にあると知らないから、『書紀』を疑ってみたくなったのだ。

つぎには「鼠ノ石窟」の意味である。これも朝鮮語から、その類音から、考えられるのではないだろうか。

辞典をひいてみる。

「鼠ノ石窟」tsy•to:ngul

これからすると、「鐵と銅と」と似てる。

鐵　tsai•銅　tong

だがもう一つ　大将　　鍛冶屋　tae•dzang　tae•dzang Kan

カナで書くと、鼠ノ岩窟、チー・トーングル

鐵　チャル・銅　トング

大将　ティ、ヂャング

鍛冶屋　ティ、ヂャングカン

「鼠ノ石窟」とは「鐵と銅」のことか、あるいは「鍛冶屋」のことを表現した（朝鮮語で類音）と考えてよさそうである。

そうすると、次に「青」・「白」をどう解するかで、右も決まることになると思われる。これが人間を意味するとなれば、「鼠ノ石窟」＝鍛冶屋ということになるだろう。

「茲ノ山」のあとに記された「直入縣の祢疑野」とは竹田市の北、城原（キバル）を根拠とした天皇方からみて宮城村の西方の市用（いちもち）の横穴群大小二十一箇が、土蜘蛛の伝説地となっているのを知ってみると、此所では「浜脇南」の横穴群と考えて釣り合いがとれそうだと思った。

『別府市誌』（昭和六十年三月刊）によると、第三編「別府のあゆみ」第三節に、「別府市の横穴墓」（二九七二九九ページ）の説明があり、金毘羅山横穴群（26）と、平尾・芝尾横穴群（24）の二群がある。土蜘蛛「青」と「白」との二群に相応わしいと思われる。修福寺に出土遺物の一部が保存されているそうで、各種の玉のほか鉄の鏃や釘などがあるという。（金属技術者）

先年、入江先生に案内して頂いて此の付近を歩きまわつたとき、これらの横穴群の付近は、草木の生茂るにまかせ、横穴はいかにもヘビの巣窟になっていそうで気味が悪かった。地名から云えば、別府の四ケ所のタタラ地名群の一をしめ、ウト（洞）・登り立・穴守などをはじめ山ミコや山田迫、さらに隠れ山（落人伝説あるも、おそらくタタラ付近に人々をよせつけないことから、うまれたものだろう）などあって、古代に半島からの技術者達をふくめた鉱産業の人々のすみそうな所である感が強い。

地理的には碩田国の国府所在地（いま古国府）にあまりに近く、東側の滝尾・下郡との中間の羽田（はた）、そして百穴群の存在と比べて、むしろ似かよっているようにも思われる。

しかしまた、異なる点も大きい。滝尾・羽田のすぐ南に碇山・曲（イカリ・マガリ）の地名があり、先年、たまたま曲に小学校を作るとき、円形住居趾内に、小さな

矩形のホリコミがあり、白粘土がつめられ、それが焼かれていた。鋳鉄の遺跡のようでもあったが、何しろ初めての経験で、よく分らぬままとなった。

別府の方での四つの「タタラ」地名のうち、この浜脇を除く三所のタタラには、鶴見のタタラの南に「尾曲」（マガリ）が、鉄輪には「ウカリ」（元はイカリからの転）が、そして内竈には「狩落」（カリ）があって、これも或いは、と思わせる。三ケ所ともに、カリの地名が近くにある。

カリとは、朝鮮語でKuri（カリ、銅の義）の音写である。タタラの近くに、みな、カリ地名がある。

それに対し、浜脇のタタラ近くは、山あいであって、滝尾・ハタ・曲のように大分川岸でしかも国府の対岸だというのではなく、別府の他のタタラ地区のように開けた高台地でもない。山あいの、人里かくれた地形であって、しかもカリ地名は無い。

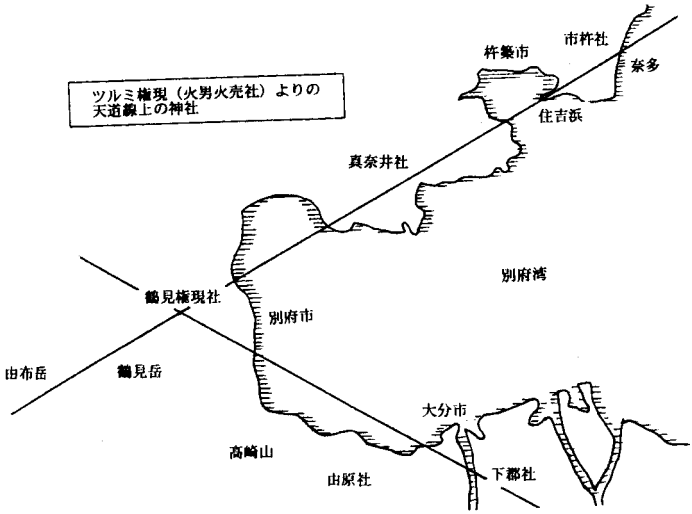
さらに浜脇のタタラ近くに「隠山」の地名があり、近くに「山ミコ」というような気味わるげな地名さえ残っている。大分と別府の両方の間にありながら、山あい深く、とり残されたような孤立した地形のところとなっている。二つの横穴古墳群もある。

ここは、速津媛の勢力が及ばなかったのではないだろうか。そう考えると、「茲の山の土蜘蛛」というのに都合が良くもある。「鼠ノ石窟」の「青と白」という二群のカジヤ集団に都合のよい土地となりそうでもある。

四、速津姫のこと

本紙の第三号（一九八九）に、「景行西征と速津姫の奉迎」と題しながら、結局は、媛の所在は明らかになし得なかった。『風土記』では、姫はわざわざ佐賀ノ関の宮浦まで、天皇を迎えに出向されたように記されてもいる。

その後、本紙第七号の「トビと太陽と…」の中での、天道信仰・それによる三〇度南北への線上に天道信仰が分かる。北三〇度の線上に、ムナカタ神（別府、ナダ）、住吉神（キツキ）、八幡神（日出、ナダ）と北の神々が鎮座し、南三〇度線では、大分川右岸に下郡社（シモゴ



リヒコ祖母山神）と南部の神に連っている。多くの社が存すると知って、ツルミ権現（火男火売社）の存在の重要性を再認識したが、これも鶴見岳の神（火の神）を祀る社としての理解にとどまっていた。

ところが面白いことに、左のような伝説がある。

昔、由布岳と祖母岳と（ともに男神）が、鶴見岳（こちらは女神）を競いあったが、祖母の神が争いに負け、遠く県南の方に退いた、というのである。

そうすると、右の30度線の東南のさきが大分川口の右岸に下郡社（シモコリ彦の社、祖母山の神）に達するという関係は何を意味することになるのだろうか。

あるいは速津媛のいう南のネギノの神々（打猴、八田、国麻呂の土酋たち）との関係を暗示しているのであろうか。いろいろな考えがうかんでくるが、ともかくも、30度線（天道信仰）と、三つの山の恋愛物語とに少し伏線があるのではなかろうか。

もう一つ、別府市火売区の西南（鶴見岳に近い所）に火男火売神社があり、そしてまた火売区の東北境（さきの火男火売社より東北30度にあたる）に火売社（ホノメ）が祀られている。これが何なのか？　つい速津媛のことを連想してしまうのである。

今回、鼠ノ石窟と土グモのことを考えてまとめた後、ランドル・コリン著『脱常識の社会学』を久しぶりに手にしているうちに、「神の社会学」の中に、神の類型は社会の類型に対応する、という項目があって、宗教の基

盤に対して鋭い指摘のあるのに気がついた。そこで、此の速津媛を考え直そうと思い立った。

ツルミ権現のすぐ南に「タタラ」の地名がある。また此の社を東に、春木川を下って行くと、川口北に古墳群がある。鬼の岩屋とか、土蜘蛛とか呼ばれているが、案外これが速津媛のものではなかったのか？

そう考えると、何となく、速津媛の記事が、筋道立って理解されるようにも思えてくるのである。

もう一度、『書紀』と『風土記』の記事を、じっくり読み直してみよう。ツルミ権現社は、案外、速津媛それ自身なのかも知れない。媛がシャーマンとしての活動が山の神に迄昇格したのかも知れない。

その例はよくある。大野郡千歳村柴山八幡のヒョウタン祭りも、陣道（陳道のこと、道案内）が神様に昇格した例だし、同じく臼杵市の祇園祭りの陣道さまも同じである。東国東の岩倉八幡のケベス祭りなどは、さらに陣道警囂（ケイヒッす、シーッシーッと言って歩くコトバ）のケイヒッが人格化して、飛び出してケベス様になってしまった。どんなにでも変化するのである。

そう思ってみれば、宗教社会としての神格、民俗学としての祭礼、考古学としての石棺、霊物というように別々に分離しての考察は、それはそれで良いとして、さらにあらためて、その歴史的合一性とその変化とに目を注いで見ることも必要なのではないか。長い年月の変化である。共同で討議してみたい。

さらに『書紀』と『風土記』とに相違があること自体が、政治的に手を加えたものとして、現地の実情と合わせて考えてみる必要がある。

言うは易く、行なうは難い。だから「速津媛の所在」も不明のままに過ぎて行く。あえて乱暴な提言を試みたのも、それが、何かの前進につながればと思うからであり、私自身も、今後さらに考えをすすめて行きたい。

あれを思い、これを思うと、分らなくなってしまう。別府のタタラ文化に取り組んで数年、いかにも進歩しないモドカシサに焦りを感ずるが、偏えに御宥恕ありたい。つぎへの前進のために、切なる御高教をお願いして筆をおく。